

2. 県内の天候の推移



台風の真ただ中の中の一筋通り (写真提供：奈良新聞社)

台風が近づく15日午後に奈良地方気象台の予報によると、県内が暴風域に入るのは15日夜半すぎで、風雨がひどくなるのは16日正午ごろ。風よりも雨が多量になるのが特徴であり、台風接近前は局地的な大雨も予想されるというものでした。15日午後9時30分に暴風雨・洪水警報を発表。県河川課水防本部でも、台風上陸前の16日午前10時に水防警報第1号を、続く午後1時に水防警報第2号を出し、県の平

坦部でも大雨に対する警戒を怠りませんでした。しかし、県南東部の山岳地帯では16日未明ごろより1時間雨量20ミリを超える状況でしたが、平坦部ではさして雨も降らず16日朝には薄日が漏れるところもありましたが、その後、正午ごろより県内は暴風域に入り次第に雨、風ともに強まりました。奈良市では台風が最接近した午後1時46分には最低気圧946.8ヘクトパスカルが観測され、これは現在まで県内で記録された最も低い気圧となっています。また、最大風速は午後1時50分に南南西25.0メートル/秒、最大瞬間風速が午後1時41分に南南西42.4メートル/秒でしたが、折からの強風で奈良地方気象台の窓ガラスが吹き飛び、観測機器が破損してしまったため、それ以上の測定はできなくなっていました。暴風と雨はそれから夕刻まで続き、午後5時に暴風雨・洪水警報が解除、翌17日は朝からからりと晴れた台風一過の天候が訪れました。

3. 被害のようす

伊勢湾台風の被害がまだ人々の記憶に生々しく残っていたこともあり、県河川課内に水防本部を設置し応急処置用の資材を用意したり、県警本部では県内117か所を危険区域に指定して警ら強化したりなど、県内各所では15日から警戒態勢に入っていました。伊勢湾台風で大きな被害を受けた五條市では家財道具などの避難準備が進められ、窓に板を打ち付け、ろうそくや缶詰などを買いに走る姿が見られ、奈良市内でも電気店で電池や照明器具が飛ぶように売れたということでした。各学校も、15日午後の時点で翌日は休校とすることを決めるところが多く、災害を未然に防ごうと万全の備えを行っていました。

しかし、実際に台風が襲来すると、雨よりも風の被害が大きく、県内各所では市街地で商店の看板や屋根瓦が飛び、多くの家が倒壊しました。16日午後2時には奈良市大森町で木造平屋建ての家屋が、家財道具もろとも背後にあった池の中へ突風で吹き飛ばされました。住人5名は近くの小学校に避難していたため無事でした。18日朝からは家人が池に浮いた家から家財道具を引き上げる姿が見られ、同日午後1時には県警機動隊が駆けつけ、家を池から引き上げる作業が始められました。

県警本部のまとめによると18日午後5時の時点で、家屋の全壊126戸、半壊907戸、流失2戸となりました。また、学校関係の被害では奈良市で小学校の校

舎の全壊、大和高田市で小学校講堂の全壊など、県教育委員会の20日の発表では被害総額1億8,000万円に及び、伊勢湾台風時の8,000万円を大きく上回りました。

農業関係においては「戦後最高の大豊作」と大きな期待が寄せられ、収穫の秋が心待ちにされていましたが、強風が水稻や野菜、果実を一挙に吹き飛ばしてしまいました。稲作は予想していた収穫量の4分の1にまで減ってしまい、県が18日午後3時の時点で集計したところでは、農業関係への被害だけで35億6,419万円にも上り、一般家屋への被害を除いた総被害額49億2,678万円の大半を占めました。ほか、林業では3億2,757万円の損害があり、このうち3分の2は倒木による被害でした。商工業は倉庫や工場の全半壊などで、3億1,158万円の損害が計上されています。風台風ということもあり、比較的土木関係の被害は大きくありませんでしたが、それでも河川97か所、砂防32か所、道路494か所、橋梁19か所の計644か所に被害が出て、その額は2億5,878万5,000円に達しました。

交通機関は、国鉄（現JR）関西線が正午から完全にストップし国鉄奈良駅で

件名 村名	人的被害(名)			家屋被害(戸)					非住家 被害(戸)	罹災者 (名)
	死者	負傷者	行方不明	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水		
奈良市	2	12		112	383				553	1,958
大和高田市	1	15		18	36				58	266
大和郡山市		1		36	142				265	754
天理市		4		10	65				156	370
橿原市	1	5		8	61				89	307
桜井市		1		17	36			1	89	241
五條市	1	2		13	96				92	530
御所市		5		10	95			10	47	553
月ヶ瀬村					4				47	13
都祁村				6	149			27	157	401
山添村				8	49				52	260
生駒町		26		51	112				178	711
平群村				14	23				53	187
三郷村		10		2	42				11	177
斑鳩町		2		14	18				50	176
安堵村				8	29				62	146
大三輪町				2	36				119	202
川西村		2		11	38				166	236
三宅村		12		19	40				216	276
田原本町				12	29				192	213
大宇陀町				3	10				13	86
菟田野町		2		2	2			20	35	106
榛原町		3		10	36				58	180
室生村				7	26			1	38	190
曾爾村				1	1		1		6	8
御杖村				11	28				27	174
計	5	102	0	405	1,586	0	1	59	2,829	8,721

市町村別被害一覧（「奈良公園の第2室戸台風の被害について」より）

は約500人が待合室や構内に避難し、奈良線、桜井線も不通となりました。近鉄も午後0時30分から運行を停止しました。路線バスも全面運休し、県民の足は完全にまひ状態になりました。鉄道は19日朝に奈良電鉄（現近鉄京都線）の奈良－新田辺間が開通したのを最後に全線が復旧しましたが、バス路線は19日の時点でも山間部を中心に一部不通が続きました。

強風による電線の断線や電柱の倒壊などにより、午後1時前後から電気はほぼ県内の全域で止まりました。翌17日には復旧し始めましたが、電柱が多数倒壊した地域や、吉野、宇陀といった山間部では復旧が遅れました。また、停電に伴い断水も各所で発生しています。例えば奈良市では、京都府相楽郡木津町（現木

県内各地のようす（写真提供：奈良新聞社）



根こそぎ倒れた春日大社の大杉



屋根ふきをする奈良市内の映画館



吹き飛ばされた奈良署前の露店



大荒れの田原本町



天理市内の家屋倒壊現場



倒れた土塀の後片付け。天理市内にて

津川市)で送電用の鉄柱が倒れ水道用水のくみ上げ設備に電力が供給されなくなったため断水しました。送電が開始されてからも電力不足で揚水能力は十分に復旧せず水の供給は滞り、給水車や消防車、散水車を出動させて対応しました。

電話回線は市内回線3万3,000回線のうち1万3,000回線に、市外回線は1,700回線のうち400回線に被害が出ました。復旧には相当に時間がかかり、19日の時点で不通個所の復旧率は、市内回線で3割、市外回線は7割5分でした。電話回線についても山間部では復旧が遅れ、それが山間部の被害状況の把握に手間取った要因の一つともなりました。

県南部とは交通や通信が途絶したため、被害の全容はなかなか明らかになりませんでした。県災害救助隊本部は奥吉野、宇陀方面の被害状況をつかむため自衛隊に協力を要請し、航空機や自動車で調査を行いました。状況ははっきりしませんでした。そんな中、17日午後2時ごろに、徒歩で10時間余りをかけて五條署まで出頭してきた野迫川村の警官により被害報告が行われ、19日朝には十津川村の助役が県庁まで出向き状況説明がなされるに及んで、ようやく全容が分かり始めるという状態でした。

それら報告によると、県南部でも暴風による家屋の倒壊や森林の倒木などの被害が多く、特に南部では雨も多量に降ったため、屋根が吹き飛ばされたところに雨が吹き込み「床上浸水」するという被害が十津川村で出ました。同村内では、集落の大半が全半壊する被害に遭ったところもありましたが、これは周囲を山に囲まれ、すり鉢の底のようになった地形に強風が吹き込んだため、当時の山間部の住宅には石を柱の下に敷くだけの基礎工事のものが多く、山腹に吹き付けた風が旋回して勢いを増し、容易に持ち上がってしまったために起こりました。

地元の古老の話では、明治22年の大水害はもとより、昭和9年室戸台風でもこれほどの強風被害はなかったとのことで、村始まって以来の強風が村内を吹き荒れました。

■ 3-1 文化財などへの被害

県の重要な観光資源でもある奈良公園を含む春日山一帯は、強風により倒れた樹木が10万本前後にも及んだと推定されています。そのうち、平坦部でおよそ2,000本、春日山付近では9万8,000本となり、これに東大寺や興福寺、春日大社内のもを加えるとさらにその数は増えたと思われます。過去に受けた強風被害では、「大正元年9月23日の台風被害では凡そ^{およ}17,800本と云われ、更に昭和9年9月21日の室戸^お台風に於ける被害は総数8,450本、その中平坦地域では293本、春日山一帯で3,861本と推定されているが、この度の被害本数中には人工林のものも含んでいるが春日山付近では凡そ25倍、平坦部地域では凡そ7倍の被害」(『奈良公園の第二室戸台風の被害について』)に達し、いかに風が強かったかがうかがい知れます。公園内には樹齢300年を超える直径2メートルもある松の巨木などが無残にも根こそぎ倒れ、園内は足の踏み場もない有様となりました。散乱した樹木の撤去は、県の要請により自衛隊が出動し、大型クレーンを使って行われました。県が提出した復旧予算案では樹木の片付けだけで2,500万円の費用がかかるとの見通しでした。

第2室戸台風により被害を受けた文化財は、国宝や重要文化財など国が指定したものだけで31件に及びました。被害地区は奈良市が多く、次いで大和郡山市、南部に行くほど被害は少なく、県教育委員会が20日に最終的にまとめた被害調査では、文化財関係の被害は70件2,474万円でした。



奈良公園の被害（『奈良市災害編年史』より）



倒壊した春日大社一の鳥居
（『春日大社一の鳥居他一棟災害復旧工事報告書』より）



自衛隊による作業（写真提供：奈良新聞社）



強風で倒れた樹齢570年余の大木。
現在は奈良県立万葉文化館に展示されている



改修中だった興福寺大湯屋（写真提供：奈良新聞社）



油阪の蓮長寺鐘楼（写真提供：奈良新聞社）



倒壊した般若寺の集合住宅（写真提供：奈良新聞社）

中でも新聞各紙で報道されたのが、春日大社の参道口に立つ一の鳥居の倒壊です。16日午後2時すぎ、吹き付ける強風に重要文化財にも指定される朱塗りのみやびやかな姿は見る影もなく、メリメリと音をたてて崩れ落ちました。その鳥居の道路を隔てた向かい側に立つ興福寺の大湯屋は、ちょうど解体修理中でしたが、組まれていた足場ごと崩れ修復のために用意した鎌倉時代の古材もその下敷きになってしまいました。この建築物も重要文化財でした。興福寺では五重塔の相輪が強風で曲がるなどの被害も出ています。

ほかにも、二月堂近くの良弁杉らうべんが強風でポッキリと折れてしまい、お水取り用の水をくむ若狭井（重要文化財）の屋根を潰すように倒れ、奈良公園から2キロほど西へ行った油阪では、蓮長寺の鐘楼が倒壊しました。

その他の地域では、大和郡山で柳沢神社の拝殿が倒壊したり、薬師寺の東塔（国宝）の相輪が傾いたりした被害が出ました。法隆寺では建物自体に被害はありませんでしたが、伽藍がらんを取り巻く樹齢500年超の松の大木約50本が折れました。

■ 3-2 人的被害

被害のほとんどが、倒れた建物の下敷きになって命を失うという事故でした。

9月16（土）午後1時40分ごろ 高市郡高取町

2階建て住宅が倒壊し女性（60歳）が逃げ遅れ、はりの下敷きになり頭がい骨骨折で死亡した。

同日午後1時40分ごろ 橿原市一町

木造2階建ての宗教施設が倒壊し逃げ遅れた2名が下敷きに。女性（12歳）は毛布と布団で頭を覆いながら入り口近くで死亡していた。一緒にいた祖母（69歳）は全身打撲の重体だった。

同日午後1時50分ごろ 奈良市般若寺町

5世帯が住む集合住宅が倒れ、女性（42歳）が逃げ遅れて下敷きになり圧死した。

同日午後1時30分ごろ 大和高田市南市場

木造わらぶき2階建て家屋が倒れ家族6人が下敷きになり、男性（67歳）が即死した。男性（36歳）とその妻（25歳）は顔などに全治1週間の打撲傷を負った。

同日午後2時ごろ 奈良市二名町

女性（75歳）が自宅から裏戸を開けて外に出たところ、突風に吹き飛ばされて頭などを打って付近の病院に収容されたが、死亡が確認された。

日時不明 五條市牧町

17日午後1時30分ごろ、吉野川沿いの木に頭に傷を負った男性（年齢不詳）の遺体が引っ掛かっているのを地元中学生が発見。解剖の結果、死因は水死で頭部の傷は死後のものと判明し、警察では台風の被害者であると断定した。死亡推定時刻は16日正午ごろで、高さ4メートルの枝に引っ掛かっていたのは、川がそこまで増水していたため。

■ 3-3 被災者への救援

県内各所で甚大な被害が多発していることを受けて、まずは18日午後8時10分に奈良市と大和郡山市に災害救助法が適用されました。続く19日には天理市ほか18市町村に、21日の午前中には、橿原市や桜井市、田原本町、山辺郡山添、宇陀郡御杖村など32市町村に拡大され、伊勢湾台風の19市町村を大きく上回りました。

災害救助法については、県は当初適用しない方針でした、しかし「報告が入るにつれて全県の被災戸数が全壊に換算して千百七十三戸に達することがわかった。このため『人口百万未満の府県で被災戸数が全壊換算千戸以上あれば、通常基準の半分で適用してもよい』という救助法の規定にもとづき急にこの措置をし



台風の後片付け（写真提供：奈良新聞社）



台風が去った奈良公園（写真提供：奈良新聞社）

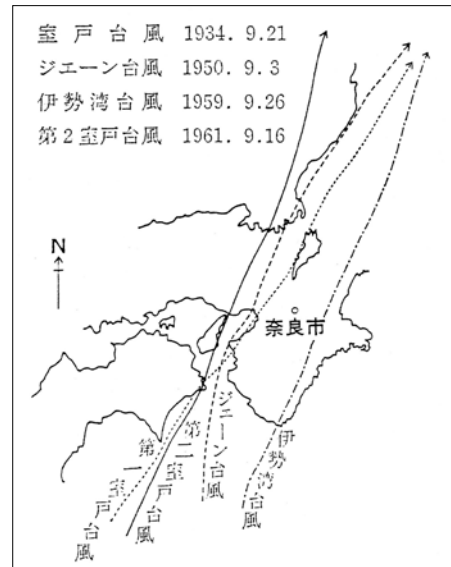
たものだが、天理市のように予期しなかった発動を受けて、まごついたところもあった」(『大和タイムス』昭和36年9月20日付「二十一市町村に災害救助法」)という状況でした。

ほか、被災者には県民税の減免措置や、県立高校の学費を年度末まで被災程度に応じて減免するなど、金銭的な優遇策も講じられました。また、家屋の全壊などで住む家を失った567戸の被災者に対し、計278戸の仮設住宅が建てられることになりました。

4. この災害の特徴

進路が昭和9年の室戸台風と酷似していたため、通過後の9月18日に気象庁により第2室戸台風と命名されました。その勢力は室戸台風が室戸岬上陸時に最低気圧912ヘクトパスカルだったのに対し、第2室戸台風は930.9ヘクトパスカル。県内での計測は室戸台風が968.4ヘクトパスカルで、第2室戸台風では946.8ヘクトパスカルと県観測史上の最低値を記録しています。また、最大瞬間風速は42.4メートル/秒と、記録上は昭和54(1979)年9月30日計測の47.2メートル/秒に及んでいませんが、これは観測機器が破損してしまったためであり、正確な数値は観測不能となっています。

当初は「風よりも雨量に注意」と呼びかけていた天気予報が外れ、予想外の強風が吹き、それによる被害が拡大しました。風による建物の倒壊は一般家屋が多く、倒壊家屋の下敷きになって5名が亡くなっています。



室戸と第2室戸進路(『奈良市災害編年史』より)